日本文化部会

【概要】

原　　基　香*

はじめに

第14回国際日本学コンソーシアム日本文化部会は、12月10日、文教育学部１号館１階第１会議室において開催された。「グローバル化と日本学Ⅱ」というテーマのもと、６人の発表者による研究報告が行われた。以下、各報告の内容と質疑応答について概要をまとめる。

１．ジリアン・バーント（南カリフォルニア大学大学院生）「平安時代の教育史を考え直す：藤原頼長の学問について」

平安時代の公家藤原頼長について、学問や教育という側面を掘り下げることで、保元の乱での評価を中心に構築された頼長像を再検討した報告である。頼長は17歳から漢籍を勉強し始め、經家（儒教）・史家（中国の歴史）・雑家（教育・文学雑多）の３区分の書籍を系統立てて学習したが、その学習過程は、大学寮における学習過程と異なる点も多く、頼長は独自の方法で学問を修めていたことを指摘した。

質疑応答では、頼長に関する日本語や英語で書かれた先行研究について、議論となった。また、博士が上級貴族の子息を生徒役として、博士自身が読みたい書籍を勉強するために利用していたという、当時の教育における生徒役についてもコメントがあった。

２．グレン・イェンジェイ（ワルシャワ大学准教授）「島井宗室（1539-1615）に関する史料に見える武士との関係とその意味」

16世紀の博多の代表的な豪商の１人である島井宗室について、島井家文書をもとに宗室と武士との関係を検討した報告である。島井家文書を書状・遺訓・系図・年録の４種類に区分し、書状・遺訓を史実の記録、系図・年録を抱負の記録として分析した。その上で、史実の記録に表れる宗室と武士の関係は御用のような経済的な関係が中心である一方、抱負の記録では武士に関する出来事は些細なものでも記載され、大名や天下人に関する記述も見られ、武士との関係を示すことで宗室の社会的地位を上げようとしていたと述べている。

質疑応答では、島井家文書を史実に近いかどうかで史実の記録と抱負の記録の２種類に区分している点について議論となった。

３．世川祐多（パリ・ディドロ大学大学院生）「近世後期の江戸における武家の養子と身分～滝沢馬琴を事例に～」

近世中期以降異姓養子が普遍化して相続社会が安定すると、養子持参金目当ての武家身分の売買が問題となった。これは御家人を中心とした幕臣の養子に集中しており、地域や階層ごとにいかなる養子が実践されたのかを明らかにすることで武家社会と武士身分の問題を解明しようとした研究である。対象とした滝沢馬琴は旗本用人の家に生

＊お茶の水女子大学大学院生

まれたが、主君の下を出奔することになり、主君を変えたり浪人したりしながら町人となった。武士身分に返り咲き、なおかつ滝沢姓を残すことを諦めなかった馬琴は息子を医者に育てて松前家の家臣にしたり、下級御家人の株を買って孫を養子にしたりした。馬琴の事例から、地方の家中と江戸の旗本御家人では、身分のあり方とその社会が異なること、また武家の人間が武家に固執する意識は近世社会の中で拭い難いことが得られた。

質疑応答では、御筒持同心鈴木家の株を買って孫が幕臣となったが、滝沢家のその後や、御家人株を買うことが公認されていたのかどうかが議論された。

４．馬場幸栄（一橋大学助教）「東京女子高等師範学校における天体暦計算動員の概要と背景」

東京女子高等師範学校（以下、女高師）における天体暦計算動員について、お茶の水女子大学に伝わる『水路部日誌』をもとに、概要とその背景を考察した。昭和19年から海軍水路部によって『高度方位暦』が刊行され始めたが、刊行に必要な計算作業が膨大なため、都内を中心に全国12校の女学校で学生が動員されて計算作業にあてられた。女高師の学生もその一環で動員されていたことや、女高師の教職員は動員された学生の監督業務や学生の意見の上申という形で動員に協力したこと、そして昭和20年５月26日に作業に当たっていた学生の宿舎が空襲で全焼し、終戦直前の６月に動員が解かれ学生の疎開が決定したことを述べた。

質疑応答では、動員された女学校における女高師の位置付けについて質問がなされ、女高師の学生は数日作業した後、他校の作業場に指導・補佐しに行くこともあり、水路部から他校とは違った役割を与えられていたことが示された。

５．トゥロフスカ・アグニェシカ（ワルシャワ大学大学院生）「都市祭礼と神事としての佐原の大祭－変貌する町とイベント－」

千葉県香取市の佐原の大祭について、2019年に行なった聞き取り調査と参与観察のフィールドワークの結果を報告した。本宿の夏祭りに関しては山車を紹介し、山車のコースや廻し方を説明し、神輿巡行と浜下りという行事について江戸前期と現在の様子を比較した。山車の廻し方の一つである「のの字廻し」の説明には動画を用いた。さらに秋祭りの観察では、台風の上陸前の祭礼の様子と即位の礼奉祝山車引き廻しという、2019年秋特有の祭りのあり方を紹介した。

質疑応答では、祭りにおける町ごとの地域差について質問がなされ、山車を持たない町がある一方、山車を持つ町に属する町人は自分の町の山車に対して強い自負を抱いていたことを報告者がコメントした。また、八坂神社・諏訪神社の創建時期や夏祭り・秋祭りが大祭と総称された時期についても議論がなされた。

６．潘蕾（北京外国語大学准教授）「グローバル化時代の日本学研究―中国の日本文化研究を中心に―」

中国における日本語教育、日本教育、そして日本文化研究の歴史を振り返り、日本文化研究者が今直面している問題を分析し、今後いかに世界の日本文化研究者と協力しながら中国30余年来の研究蓄積を継承・発展させていくべきかを検討した報告である。現在の日本文化研究の問題点として、長期的な展望のもとでの基礎研究が軽視されている点や研究者の研究の時間が確保されていない点、中日以外の日本文化の研究成果があまり重視されていない点や中国の日本研究に対する日本側の関心が薄い点などを挙げ、研究者の研究時間の確保、研究者の研究寿命の延長などの課題を提示した。

質疑応答では、フランスにおける日本文化研究の現状がコメントされ、国を越えて研究者が直面している問題について共有された。

おわりに

以上が日本文化部会における研究報告の概要である。発表者の扱った時代は古代・近世・近代・現代と幅広く、多様な視点から歴史・文化に関する報告がなされた。質疑応答や意見交換も積極的に行われ、日本学について十分な議論がなされた会であった。